

野島久雄著「新訂 教授・学習過程論 - 学習科学の展開 - 」放送大学大学院文化科学研究科教材、
日本放送出版協会 2006年3月20日刊を読む

創造的な領域における熟達とは

1. 個人競技のスポーツやチェスや将棋などの領域では、熟達の成果は、結果として目に見える形になりやすく、それゆえこれまで研究が多く進められたのはこのような領域であった(Starkes&Ericsson, 2003)。しかし、私たちの生活の中では、新しい情報を取り入れるとともに知識を生み出す創造的な領域での技能の熟達が、日常生活における適応的な熟達者になるためにも重要である(大浦、2000)。大浦は、そうした創造的スキル領域の例として音楽技能の熟達を取り上げているが、ここでは、落語の分野における熟達について考えてみたい。

2. さまざまな熟達の在り方

落語家のゴールの1つは、前座として入門した後、二ツ目という段階を経て、真打と呼ばれるようになることである。しかし、真打になったからといってそれが落語家の熟達の最終目的では必ずしもない。また誰もが爆笑王になることを目指しているのでもない。橘家円蔵は、古今亭志ん朝の死去に際して書いた追悼の文章の中で、次のように書いている。

落語家には三つの道しかない。うまい落語家、達者な落語家、そして面白い落語家。誰が見てもわかると思うが、うまいのは志ん朝、達者なのは談志だ。そうすると私は面白い落語家をめざすしかない。三十年前、自分の路線をそう定めた。

3. ここから分かるのは、彼が落語家の熟達の在り方として、3つのスタイルがありうると考えているということである。

落語は、芸能の一分野であり、一見お気楽な商売のように見えるが、20歳前後で入門し、40歳前によく真打になり、そこからプロとしての本格的な仕事を始め、50代はまだ若く、60代になって中堅と見なされるような分野である。実際、上で追悼されている古今亭志ん朝は、2001年に63歳で「若くして」死に、本来彼が示すはずだった円熟期の芸を見せることがなかったと考えられているほどなのである。

4. 練習の役割

それでは、落語において高齢になることが能力の低下として認識されないのはどうしてだろうか。その1つの理由は、落語が対人関係を主たる話題とする話芸であり、「情報処理能力としての知能」よりも「文化的知識としての知能」の方に重点がおかれているからであろう。しかしまた、1人でする話芸ということから、練習をするのが容易であり、また日々寄席で語ること自体がその練習と

なっていたということもいえるだろう。昭和の大名人といわれた林家正蔵(八代目)、桂文楽(九代目)、三遊亭圓生(六代目)はもちろんのこと、一見ずばらで落語の練習などしないだろうと思われていた古今亭志ん生でさえ、日々膨大な量の噺の練習をしていたということが知られている。

5 . コミュニティ

さらに重要なこととして、落語家のコミュニティの存在がある。落語家の数は最近多くなったとはいえ限られたもので、その限られた数の同じ顔ぶれが、数少ない寄席で顔を合わせることになる。そこでは、日々、うわさ話を含め、たくさんの情報が交換される。その中で、今話題になっていること、内輪で評判のよい噺家のことが、多くは冗談交じりではあるが、貴重な情報としてやりとりされるのである。落語家入門するということがきわめて厳しい約束事に縛られていて、飽きたから別の職業に変わろうとか、師匠を替えようとする事ができないという点から考えると、このコミュニティは、きわめて密で閉じられた社会である(大友、2003)。そうした密で、価値観が共有されているコミュニティの中で、大師匠として認知され、評価されることによって、熟達者としての彼らが認知されるのである。

6 . 落語の世界から学ぶこと

ここで例として取り上げた落語という世界は特殊に見えるかもしれない。しかし、落語の世界での年をとることによる・あるいは年をとるにもかかわらず生まれる熟達の在り方が明らかになれば、私たちの広い意味での生涯にわたる熟達課程を明らかにし、それを支援し、加速することもできるだろうと考えている。

1つの領域においても多様な熟達のゴールがあること、そこで熟達するためには(落語のような一見明るく気楽に見える分野でさえ)、日々の練習が重要なこと、そして、熟達を認め評価してくれる仲間が存在が重要であることは、落語の世界のみならず、私たちの日常の場における熟達の在り方を考えるときにも重要な知見であると思われる。

7 . 一流、プロフェッショナルという若くて力にあふれている人たちがイメージされることが多い。また、年をとるということは一流の世界からの脱落と見られることもある。しかしながら、今後高齢化社会を迎え、50歳を過ぎててもまだ長い年月を生きていく私たちにとって、熟達のゴールは世界一・日本一になることではないだろう。自分の身の丈に合った熟達の道を見出し、そこに向けて日々の着実な努力をするとともに、それを支援し支えてくれる仲間を見出していくということが重要であり、そのために必要な環境を、個人的にもあるいは社会的にも、整えることが重要になってきていると考えられる。

8 . 熟達は私たちの生活の中できわめて身近なものである。運転免許をとる、新しい趣味を始める、パソコンを買い換える。そうした場面で新しい学びが始まり、ある分野では熟達し、また他の分野では挫折するということもあるだろう。そのような自らの学びを振り返り、時を追っての変化を記録することから始めるとよいだろう。また、領域は違うのに共通する熟達の仕方があるだろうか。

さらに重要なのは、よりよい熟達のための学び「よく考えられた練習」をデザインすることである。自分が興味を持つことでさらに熟達したいことを選び、熟達するための練習方法を考えてみよう。実際にその学びが効果的であったかどうかを調べるためにはどうしたらよいだろうか。

P72 ~ 74

[コメント]

よりよい熟達のための学び、よく考えられた練習とは何かを目指すヒントが散りばめられた文章。

- 2010年3月27日 林明夫記 -